

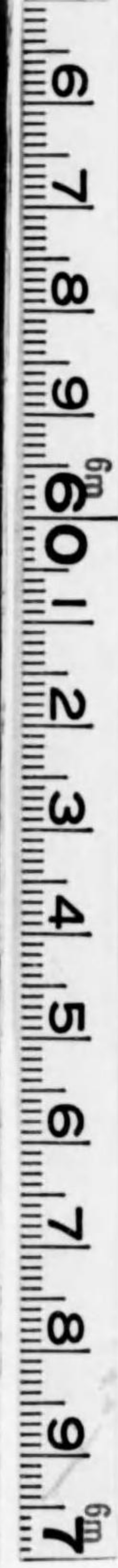
特

277
236

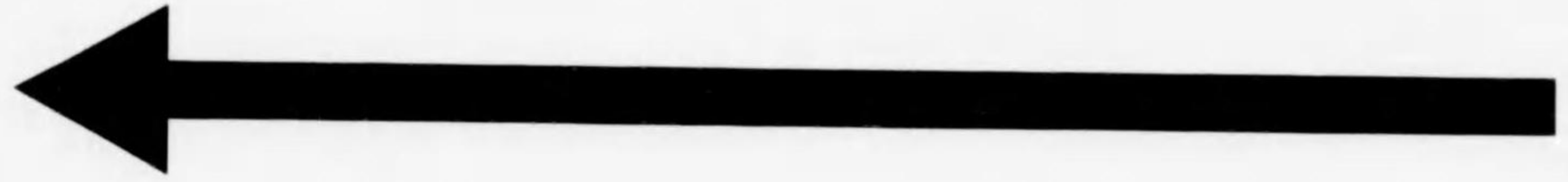
史蹟
林氏墓



東京市役所



始



林羅山先生の學業功績

我が東京市の恩人として仰ぎ、又我が國の文教の先哲として尊敬すべきものは、古來決して少くないでしやうが、我が羅山林先生の如きは、その中にありても特に敬意を表すべき偉大なる先哲であります。武は以て亂を平げ、文は以て成を守りよく國を治めます。故に馬上天下を取るも馬上これを治むべからずといひ、文武並び用ふるは國家長久の道であります。恭しく惟みるに列聖風に儒道文化を探りて、修身齊家の道、治國平天下の法となし給ひ、儒教はつひに我が國の徳教と融和渾化する様になりました。近世江戸時代約三百年の政治文教の上に於ける儒教の勢力は特に顯著にして、大に重視すべきものがあります。而して此近世儒教學統の泰斗となり、海内の文權を握るに至りし者は、林羅山先生を首とする林家累世の先哲なりと言ふも、決して過言ではありません。

羅山先生、姓は林、もと加賀の人、その後紀州に移り、先生の父信時の時京都に移り、先生は昭和八年より三十五年前の皇紀二千二百四十三年即ち天正十一年（賤岳の戦があり、豊臣秀吉が大坂に城いた年）に生まれました。先生、幼名は菊麿呂、元服して又三郎信勝と稱し、字は子信といひ、羅山はその號で、薙髮して道春と稱し、夕顔庵、尊經堂などの別號がありました。

先生は天性秀偉、神童的天才に富み、幼にして學に向ひ、記憶が強く、一度聞いたことは決して忘れなかつたさうでありました。文祿三年、十三歳、元服して東山の建仁寺に入り、長老に就て讀書を學び、學力非凡にして僧となることを勧められたが先生は儒學を好まれたので、慶長二年十五歳にして家に歸り、ますく儒教漢文を學び、十八歳に至りては、宋の朱子の四書（大學、中庸、論語、孟子）の註釋に心服し、遂に徒弟を集めて、朱子學を講義しました。時に藤原樞高は先達の大儒羅山先生より二十二歳年長りとして京都に居ましたが、世を避け人に接しなかつたので、先生は二十前の一青年なれども人に教へ、朱子學の世に行はる、是より始まり洛中遍く先生の名を知るやうになりました。先生が徒弟を集めて朱子新註の論語を講ずるや、清原秀賢之を非難して、古より勅許なければ、朝臣すら書を講ずることが出来ない。俗士にして新説を講ず、罪せざるべからずと申しましたが、徳川家康、秀賢の議を斥け、却つて羅山の好學を稱美しました。

林文敏公肖像



慶長九年、先生二十二歳に至り、藤原樞高の門に入りて學び、その智徳ますく上達し、二十三歳、初めて家康に謁して厚く知遇されました。是より先生は和漢の學を研究講義するとともに、幕府の文教、政治の顧問となり、京都、駿府、及び江戸に京都將軍家語、織田、豊臣二氏家譜、寛永諸家系圖、日本武將贊など、國史關係の著述の多いことは、近世諸儒第一といつて不可なく、又先生の獨特の點であります。即ち先生は充分日本精神を備へた大儒であります。兵法軍書關係の著述も少くありません。先生在世中、朝鮮通信使の來朝が六回ありましたが、その五回は、先生が迎接し、又、明朝、澳門、呂宋、占城、暹羅、及び南蠻に對する國書を作り、外交の政務に關する功績も多大でありました。朝鮮使節に對しては、度々その偉大な學力文才を以て彼等を驚嘆させました。

なほ先生は江戸時代初期の圖書開板鑿刻等についても、非常の功績がありました。寛永七年、幕府は先生に江戸の上野忍岡の地を興へ、學舍文庫を建てしめました。同九年には、尾張大納言徳川義直、先聖堂を建て、孔子、四子の像を安置し、同十年には、先生は始めて孔子祭典を此先聖堂に舉行しました。これ等は即ち江戸時代の學校の始めであり、又今の本郷區湯島の聖堂（大成殿又は孔子堂）の始めであります。

先生の著述はすべて一百七十部、その文集は一百五十巻もありました。明暦三年、先生は七十五歳を以て永眠しました。文敏先生と私誼しました。昔先生の師、樞高常に「道春は博文無雙、勤學頓敏なり。」と申しましたが、老年に至り、其學問政事、樞高の言ふ所に遠はず、故に文敏と誼されたのであります。先生四子あり。長子次子相ついで早く歿し、第三子鷲峰が家學をつぎ、又一代の儒宗となり、鷲峰の子鳳岡も、また父祖をうけ、一代の大儒となりて、ますく林氏の學風と一世の文教を盛ならしめたのみならず、鳳岡以後林氏は世々大學頭となり、江戸時代の學務を掌り、遂に海内の文權を握るに至りました。これも皆羅山先生の遺徳餘澤によるものであります。

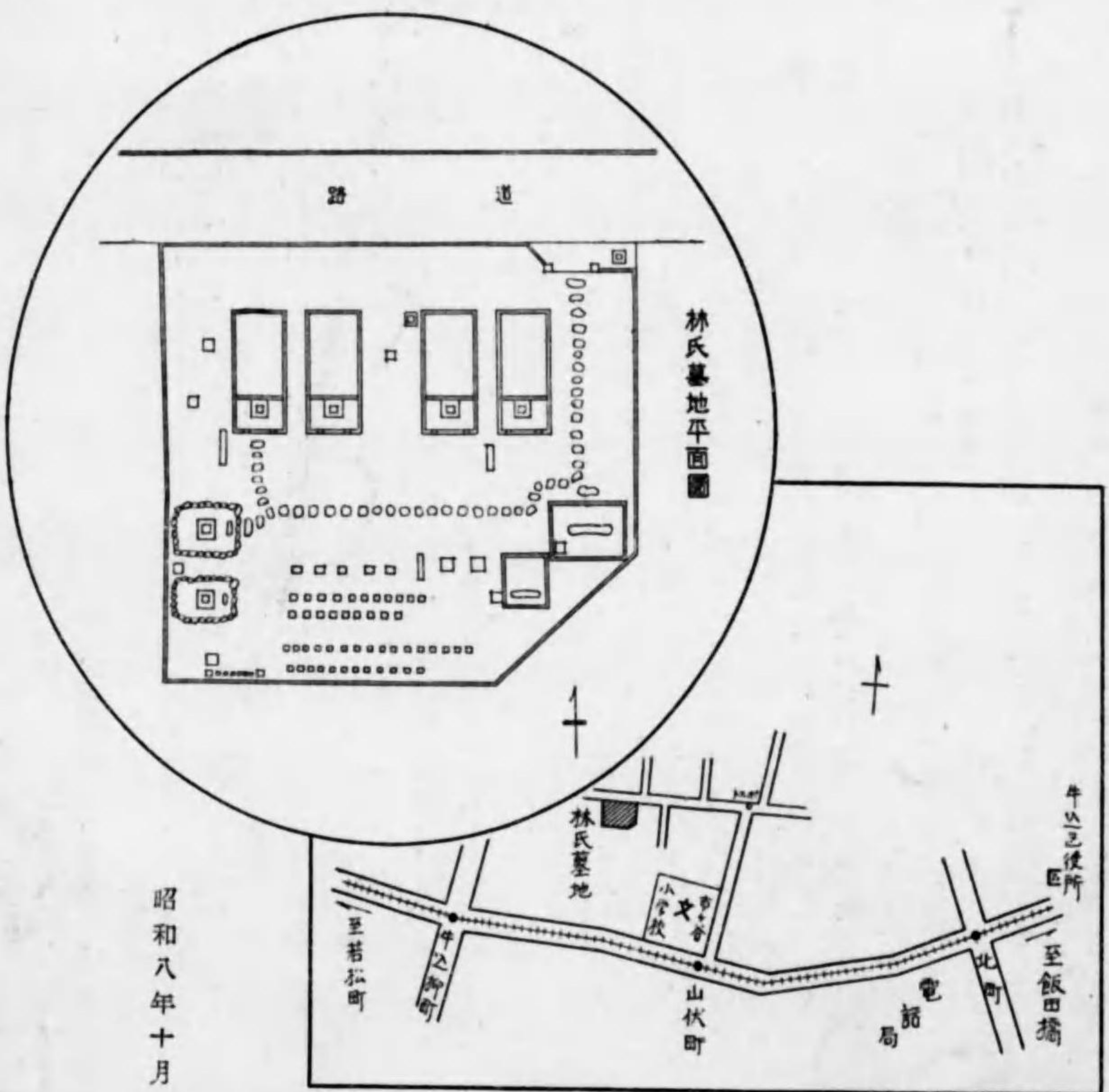
先生は、其子孫に名儒碩學を出し、學者の家として長く榮えたのみならず、其同學及び門人にも第一流の儒者として名ある者多く、山鹿素行の如き特に異彩を放てる者も、その幼時先生の指導教訓を受けて大學者となりました。江戸時代の學術特に儒教文化は、全く先生を中心として開發振興したものであります。

之を要するに、先生は近世日本の學術文教の復興時期に於て大功績を奏した和漢兼學の先哲として尊敬し、又江戸即ち今の東京を盛ならしめたる事にも與りて力のあつた實務的の學者として感謝すべき先哲であります。明治四十三年十一月十六日、先生は贈正四位の榮典をうけられました。（文學博士 中山久四郎記す）

林氏墓地沿革

位置 牛込區山伏町十六番地
交通 市電、山伏町停留場下車

此處は徳川幕府の儒役林氏累代の塋域で開祖羅山以下十二世支族春徳以下八世其他一族を儒葬した處であります。初め上野忍ヶ岡の別邸内にありましたが元禄十一年三世鳳岡の時替地を此處に賜ひ墓地も亦移轉改葬しました。此地は城北の一高丘を占め遠く富士秩父の連山を望み老樹鬱蒼として幽邃の勝區でありましたが明治維新後漸次縮少して現在の地域となりました。大正十三年二月には史蹟名勝天然紀念物保存法に依つて東京府知事より史蹟として假指定を受け、尙大正十五年十月内務大臣より指定せられ、次で昭和三年二月内務大臣より本市を其の管理者に指定されましたので昭和六年三月市は遺族と相諮つて墓域を修築し永久保存の施設を了しました。



昭和八年十月

終